

オリンピックと幼児期のスポーツ

新名謙二

(大学教授)

1年後に東京2020オリンピック・パラリンピックが開催されます。トップレベルのスポーツ選手の競技を見るたびに、その能力の素晴らしさにいつも感心させられます。このような優れた競技力を身につけるためには

低年齢の頃から専門種目の練習に取り組む必要があるのでしょいか。種目によって状況が異なりますが、幼児期から一つのスポーツ種目に集中して取り組むことは、必ずしも好ましいこととは言えません。本稿では幼児期の子どもたちに、スポーツにどのように取り組ませればよいかについて考察したいと思います。また、オリンピック・パラリンピックの

「見るスポーツ」としての側面にも着目し、どのようにすれば自国でのオリンピック・パラリンピック開催という貴重な機会を子どもたちのスポーツ活動に活かすことができるのか、という点についても考察してみます。

発達段階に応じた働きかけの重要性

子どもの身体の成長は、全身が同じように発達していくわけではありません。身体の部位や器官によって、急速に発達する年齢が異なっています。特に神経系は若い時期に急成長し、脳や脊髄の大きさは6歳ですでに成人の90パーセントの水準になります^{注1}。これに対

新名謙二（にいな けんじ）
お茶の水女子大学。

して筋肉や骨格は、個人差や性差があります
が10代前半に急成長し、10代後半まで成長
が続くことは周知の通りです。幼児期の子ど
もたちに適切なスポーツ活動を考える際には、
このような身体の発達段階を考慮することが
不可欠です。私の恩師で長年水泳の競技力向
上に貢献されてきた宮下充正先生は、「動きの
調節をつかさどる脳・神経系の発達が著しい
11歳までに、運動技能の基本を体得する」こ
とを提案しています。さらに、スポーツ活動
に限らず乳幼児期の子どもに対する大人の働
きかけを重視して、「乳幼児期に余分と思われ
るものを含めていろいろな情報を与え、しだ
いにその内容を整えていけば、知的な才能の
芽生えを見つけ出すことができるようになる
だろう」と主張しています。つまり、幼児期
には一つの種目に集中するのではなく、幅広
くスポーツ以外の活動も含めて多くの種類の
活動を体験することが重要であると言えます。

もちろん、幼児期からその種目に特有な練
習を積み重ねて難しい技術を習得することが
必要な種目も存在します。男子体操競技の床
運動での4回ひねりや女子フィギュアスケー
トの4回転ジャンプなどは、小さい頃からそ
のような技を意識した身体の使い方を身につ
けないとできない技です。体力よりも技術が
重要になる種目では、幼児期から専門的な練
習を積み重ねることが必要であろうと思われ
ます。しかしながら、オリンピックや世界選
手権の舞台で活躍できるような選手はごく一
部です。環境や才能によほど恵まれていない
限り、幼児期からすべてをかけて一つの競技
に集中することは、リスクが大きいと言わざ
るを得ません。本格的にスポーツ競技に取り
組む場合であっても、複数の種目を体験でき
たり、スポーツ以外の活動にも参加できたり
する余裕のある環境に子どもたちを置くこと
が大切であると考えます。

イベントによる盛り上がりを活かす

昨年は日本でラグビーワールドカップが開催され、大いに盛り上がりました。私が所属するお茶の水女子大学でも、附属幼稚園や附属小学校で子どもたちが「ラグビーっこ」をして遊ぶ様子が見受けられました。このように、大きなスポーツイベントは子どもたちをその種目に引きつける力もついています。オリンピック・パラリンピックでは数多くの種目が行われ、テレビ中継やスポーツニュースなどで競技の様相を目にする機会が増えます。これは、子どもたちにスポーツに参加するきっかけをつくる大きなチャンスだと思います。

人々がスポーツ活動に参加したり、スポーツを見たりすることを含めて広くスポーツにかわりをもつことを、スポーツ社会学の用語で「スポーツ参与」と言い表します。人々

がスポーツに参加するようになる過程は「スポーツへの社会化」と言われ、スポーツ社会学の重要な研究分野の一つです。スポーツへの社会化に影響を及ぼす三つの要因として、①個人的属性（個人の身体的・心理的特性）、②重要な他者（コーチ、友人、モデル選手、両親等）、③社会化状況（社会的学習が行われる機会や環境）^{注4}が挙げられています。この理論は北米で提唱されたものですが、日本の子どもたちについての実証研究をまとめて、(1)スポーツ参与には、両親と友人の影響が強い、(2)特に、同性の親と同性の友人が重要な社会化エージェントである、ことなどが示されています。^{注5}

これらの知見を考慮しますと、子どもたちがスポーツ活動に参加するようになるためには、親も一緒にその活動にかかわることが重要であると言えます。一緒に参加することが理想ですが、スポーツが苦手であったり嫌い

であったりする親にとっては、それは大きな苦痛になりかねません。スポーツ施設への送り迎え、スポーツ団体の行事への参加、家庭でのスポーツに関する会話など、広い意味でのスポーツ参与で構わないと思います。親がそのようにスポーツに参加することによって、子どもたちのスポーツに関する興味・関心を長続きさせることができるでしょう。

スポーツとの良い関係を築く貴重な機会

オリンピック・パラリンピックでの選手たちの素晴らしい競技を見ることによって、子どもたちはスポーツ選手に対する憧れを抱くことでしよう。また、人間のもつ可能性やスポーツの多様性に気づく子どもたちも少なくないでしょう。それらによって生み出されたスポーツへの興味・関心を一過性のものに終わらせず、生涯にわたってスポーツとかかわり続けて生活を豊かにできるようにしていく

ことが大切です。そのためには大人からの上手な働きかけが不可欠です。何よりも大切なことは、「スポーツは楽しいもので長く続けていきたい」という好ましい感情を子どもたちの中に育むことです。そのためにはあまり競技性や技術獲得を強調せず、楽しい遊びとしてのスポーツの特徴を取り上げていくことが大切であると私は考えます。新型コロナウイルス感染症の問題が一刻も早く収束し、1年後にオリンピック・パラリンピックが無事に東京で開催されることを願っています。

注

- 1 宮下充正『子どもとときの運動が一生の身体をつくる』明和出版 2010年 p21
- 2 宮下充正『子どものスポーツと才能教育』大修館書店 2002年 p107
- 3 前掲2 p146
- 4 山口泰雄・池田勝「スポーツの社会化」『体育の科学』37巻2号 杏林書院 1987年 p143
- 5 前掲4 p145